

KoZoomサロンと唐三彩のこと

清水健二

先日の第3回 KoZoomサロン28に参加し、私の近況報告の中で、趣味として楽しんでいる彫刻作品を紹介させていただきました。

リモートで自分の作品を紹介するのは初めてのことで、このことを同じ美術仲間とお茶を飲みながらの話題となり花が咲きました。コロナ禍で作品発表の場が無くなったり、作品鑑賞を兼ねての勉強会もできなかったことから、Zoomサロンに関心が高まったからでした。

高校時代の同期生達でZoomサロンを開いていて、現在全国各地に散らばっている友人達がこのサ

ロンに参加し、先だってはアメリカに滞在されている方をゲストにお迎えして懇談したことなどを話題に、今や超高齢者になった者達がパソコンを操って何十年ぶりかで出会い、三密排除の安全状態の中で楽しんでいると言っても信じられない感じでした。

「リモート会合を普通にやれる人達の集まりですよ」と言うと、「清水さんのお友達は凄い人ばかりで、秀才ぞろいなんですね」と言われました。瞬間、秀才？と絶句しましたが、「秀才じゃなく、集歳ですよ。しっかり歳をとった爺さん婆さんの集まりですよ」と茶化しておきました。

しかしよく考えると、コロナ禍を逆手にとって、KoZoomサロンの立ち上げを発案され実現された、野口幹夫さんはじめ関係の方々の有能さに、改めて敬意を抱きまし



た。第3回 KoZoomサロン参加者は13人でしたから、合計年齢は $13 \times 86(?) = 1118$ 歳ですからね。リモートミーティングといえ、これはギネスもんかもしれませんね。しかもまだまだ増えそうですから。

さて、彫刻作品について、私の説明がどうも聞きづらかったようでした。また映像の届かなかった方もおられたので、高5期 HPで補足説明と、写真添付しますのでご覧ください。

私の小作品の題名は(子犬を抱く唐美人)で約35cmの高さです。材質は陶芸用粘土で制作し電気窯で焼結しました。一般にテラコッタと呼ばれているものです。

中国の唐の時代に人物や動物、容器類などを粘土で造形し、釉薬を施して彩色したものを唐三彩と言われています。骨董屋や、がらくた市でよく見かけますが、彩色の良さが評価基準になります。

三彩というのは、緑・赤・白または緑・赤・紫(藍)の3色を基に彩色したもので、濃淡を交え組み合わせることにより微妙な色を出す技術が必要になります。緑は銅、赤は鉄、白はアンチモン、紫はマンガン、藍はコバルトで、焼くことにより酸化し金属の炎色反応で彩色されるので、焼く前の着色とは違ってきます。感と経験を重ねて覚えていくしかないわけです。しかも年を経るにつれて微妙に色の変化もあり年代ものが高価になります。



話を戻して、私は唐の時代の人物像に興味があって、彩色技術より造形の方に関心があり、唐の美人像をこの唐三彩からヒントをもらってイメージ作りを試みました。

楊貴妃に代表される唐美人は、小太りで、丸ポチャの顔、ちょっと細めのつり目、髪型は大きく盛り上げ、変化をもたせています。長い中国の歴史の中でも、ふくよか

な美女崇拝は唐時代だけだそうです。

彫刻像は色より形、つまり造形美を追及するのが基本ですので、単色でありながら光と影で濃淡が表現されるので、彫の深さが重要になってきます。そんなことを目指しながらも、思うように行かないから次の作品へ向かうことができるのだらうと思っています。

